発達障害のある生徒への就労準備支援

■発達障害特性から生じる就労にむけた課題と取り組み

- めざす就労の具体的イメージや、そこに至る段取りを、自分ひとりでは描きにくい。または、現実味のないプランや希望を持ちがちになってしまう。
- 自身の課題、得手不得手、配慮点等については相談のみでは整理しづらく、実際の作業経験等を通しての整理が求められる。
  （本人が気をつけておくこと／支援者が把握して周囲に伝えること）
- 分かっていて当然とされる、学校生活と就労生活の違い（目的、立場、役割等）を理解しないまま就労してしまい、失敗経験につながる。

☆ 働くうえで必要な知識を学ぶ場が必要である
☆ 学んだことを実践できる場が必要である
☆ 上記のことを一緒に振り返り、確認していく機会が必要である

"身近な地域"で、"安心して"働くことを体験できる就労準備支援プログラム
オープンカレッジｉｎ美作大学 ～働くことを知る・学ぶ～

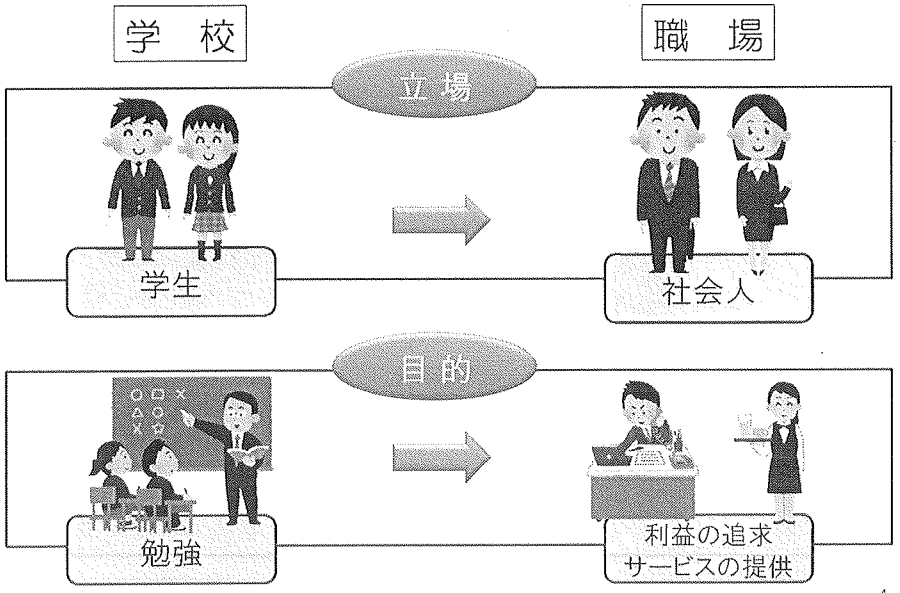
■ オープンカレッジ in 美作大学の概要

- 開始時期 ： 平成24年～（県北支所から美作大学へ協働を提案）
- 対　　象 ： 主に高校生、発達障害や発達特性があり、担任からの推薦がある生徒
  （就労にむけた準備に意欲があり、学校に安定して通えている）
- 目　　的 ：①「働く」ことに関する基礎知識の習得
  ②安心できる環境で作業を体験し、達成感を得る
  ③就労イメージの拡大や今後の進路を検討するうえでの材料とする
- 人　　数 ： 6名（3名×2グループで模擬作業やｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸを実施）
- 形　　態 ： １クール2日間（毎週または隔週実施　4時間程度/1日）
- 実施機関 ： 美作大学社会福祉学科、美作大学附属図書館、発達障害者支援ｾﾝﾀｰ
- 実施場所 ： 美作大学講義室、美作大学附属図書館
- 内　　容 ： 講義、マナー講座、ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ、模擬作業（図書館作業、事務作業）、事後に本人と所属先を含めたケース会議

■ プログラムの内容と役割分担

講義	講義Ⅰ 「働く上で大切なコミュニケーション」 （キャリアコンサルタント資格を持つ大学職員が担当） ①学校と職場の違い ②挨拶について ③報告・連絡・相談（ホウレンソウ）について	講義Ⅱ 「基本的生活習慣の大切さ」 （看護師資格を持つ大学教員が担当） ①学校と職場の違い ②朝ご飯を食べること ③睡眠時間の確保 ④朝の準備や段取り ⑤身だしなみを整える
マナー講座	マナー講座Ⅰ （社会福祉学科の学生が担当） ①挨拶と報告をする時は ②作業中の指示 ③質問をするタイミング	マナー講座Ⅱ （社会福祉学科の学生が担当） ④寝る前の過ごし方 ⑤出勤の際に ⑥身だしなみの整え方
模擬作業	模擬作業Ⅰ 「図書館作業」 （附属図書館職員が担当） ①抜き取り作業 ②返却作業	模擬作業Ⅱ 「事務作業（実習日誌作成）」 （支援センター職員が担当） ①ラベル印刷 ②ラベル貼り ③用紙のとじ込み
GW	グループワーク（ファシリテーターを支援センター職員が担当） 「講義」、「マナー講座」、「模擬作業」を通して得た知識や体験を振り返る	

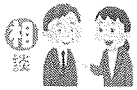
■ 内容①「学校と職場の違い」



⇒ "違い"があるということは、"知っておいた方が良いこと"がある

■ 内容②「講義」

- 働くうえで大切なコミュニケーション
  - ・「挨拶」から始めましょう
  - ・ホウ・レン・ソウ（報告・連絡・相談）は仕事の基本
  - ・クッション言葉の活用



- 基本的生活習慣の大切さ
  - ・毎日、朝ごはんを食べよう
  - ・睡眠時間を確保しよう
  - ・朝の準備や段取りは習慣にしておこう
  - ・身だしなみを整えておこう

■ 内容③「マナー講座」

- 寝る前の過ごし方
  [エピソード]
  仕事の前日に夜更かしをしてしまい、出勤後はあくびをしながら作業をする
  眠気と戦いながらの仕事は遅れるばかり
  遅れた分の影響は、同僚がカバーする結果になってしまう

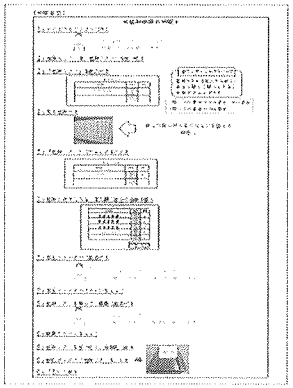
- 報告する時
  [エピソード]
  上司から頼まれた仕事（書類作成）の報告に行く
  資料の渡し方は雑で、順番や方向もバラバラ
  しかも、上司から次の指示が出る前に自分の席に戻ってしまう

- 質問をするタイミング
  [エピソード]
  仕事で疑問に思うことがあり、上司に質問しようとしているが、上司は忙しそう
  聞かないと仕事が進まない、でも上司に質問できそうなタイミングが分からない
  上司の手が空くのを待つが、時間ばかりが過ぎて何も仕事が進んでいない

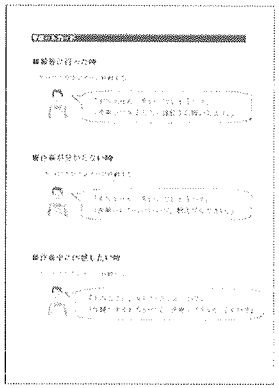
■ 内容④「模擬作業」

- 図書館作業　：　附属図書館での返却作業、抜き取り作業
- 事 務 作 業　：　ファイル作り（実際に学生実習で使用）

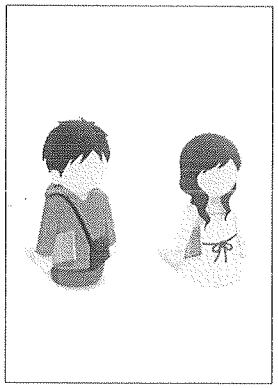
手順書



サポートカード

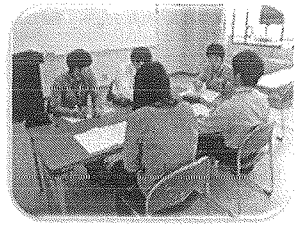


学生サポーター



■ 内容⑤「グループワーク」

【プログラムの流れ】
① 講　　義
② アンケート記入
③ 軽演劇「マナー講座」
④ アンケート記入
⑤ **グループワーク**
⑥ 模擬作業
⑦ アンケート記入
⑧ **グループワーク**



- グループワークのねらい

・学び（講義）→ 実践（ﾏﾅｰ講座、模擬作業）→ 振り返り（ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ）のサイクルをプログラム内で実施する。

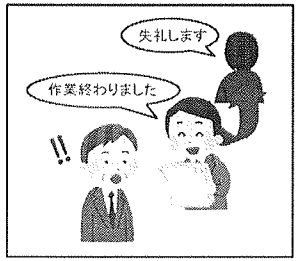
・支援センター職員がファシリテーターとなり、講義やマナー講座での参加者の学びや気付きを取り上げて、参加者同士で共有する。

・発達障害の特性から、本人だけでは気付きにくいポイントや、誤解しがちなポイントを全体で　確認しながら、職場で求められる対処方法を一緒に考える。・・・「次スライドを参照」

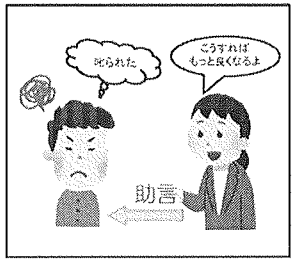
・確認した内容を、実践（模擬作業）の場で取り組み、その後のｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸで再確認することで、 自分に合った環境やサポートを知る手掛かりとする。

＜ グループワークで共有した内容（例）＞

【場面①：報告後、すぐに自分の席に戻ってしまった】
⇒ 報告したら、次の指示があるまでその場で待つ。
または、次の指示があるか上司に確認する。



【場面②：上司から仕事のやり直しを指示された】
⇒ 仕事における"注意"はあなたへの"助言"です



【場面③：質問したいが、上司は忙しそう】
⇒「すみません、今質問しても大丈夫ですか？」
と聞いてみましょう。
⇒ 質問できるタイミングに迷った時は、自分で 判断せずに、上司に委ねてみましょう。

■ 事後面接の実施（本人・所属高校・支援センター）

・本人がプログラムを通して、感じたことや学んだことを聞き取る

・プログラム参加後に、家庭や学校内で実践していることを聞き取る

・今後の"働く"（実習や進路選択）について生かせると感じたことを聞き取る

・プログラムで本人が頑張っていたこと、今後の学校生活や家庭生活の中で
出来る取り組みを書面にまとめて、本人、保護者、学校にフィードバックする

※プログラム参加者が所属する学校・機関へ訪問し、本人や担任、保護者等と面接を実施

本人、保護者、担任等が同席する場面で事後面接を行うことで、本人の得意・不得意や今後（実習や就職先の検討）にむけて家庭や学校内で実践できる取り組みを共有する

■ オープンカレッジで得られた効果（参加者）

【プログラム参加前】

・お金を稼ぐために「働く」というイメージだけが先行して、自分にとって必要な準備や、就労にむけた課題への気付きが十分ではなかった。

・基本的に決められた時間、決められた場所で話を聞くという場面が多く、報告や相談等の「自分から主体的な行動を求められる場面」が少なかった。

・職業体験の場が少なかったり、職業選択をするための材料が少ないことから、自分の興味を基準に判断しがちであった（高齢者と関わることが楽しかったので、ヘルパーになりたい等）。

【プログラム参加後】

●新たな知識の習得や具体的な使い方を学ぶ機会となっただけではなく、自分が今後整えていくべきことへの気付きや、相手の立場に気付く機会につながった。

●普段何気なく行っている挨拶や、基本的な生活習慣が、働くうえでなぜ必要（大切）なのかを学んだことにより、日常生活の中でより意識して取り組む土台が出来た。

●安心できる環境の中で、新たなスキルを実践し、うまく出来た体験を一緒に振り返ることで、日常生活の中でも、学んだスキルを活用することにつながった。

●成功体験を通して、就労イメージの拡大や自分にとって必要なサポートや環境を知る手がかりになり、今後の就労準備を考えるきっかけになった。

■ オープンカレッジで得られた効果（参加者の所属校）

【プログラム実施前】

・学校生活を送るうえでは、就労にむけた準備よりも、日々の生活支援・学習支援が中心となってしまうことが多い。

・発達障害の診断を踏まえた進路指導（ケースワーク）等、普通高校だけでは解決が難しい課題があった。

【プログラム実施後】

●学校内における発達障害のある生徒への支援を中心的に担うキーパーソンとプログラムを通して関わることで、学校内のニーズの掘り起こしにつながった。

●発達障害のある生徒に対する就労準備の必要性や、就労準備に大切な視点を共有できた。

●プログラム後に、学校での進路検討の場に支援機関が同席する等、就労にあたって本人に 必要なサービスを一緒に検討する機会（機関連携）につながった。

高等学校への普及について

○大学での実施のメリット、デメリット

- 同じような特性のある生徒が参加するので、失敗しても笑われない、安心できる。
- 高校の教員は推薦したいと思っても、保護者の理解が得られなかったり、未診断の生徒を推薦することが難しい。
- 1年生を対象としたため、プログラムの利用ニーズが出にくかった。実際は就労への意識は2年の2学期後半であるが、そこからでは準備に必要な期間が不足する（コミュニケーションスキル等）
- 大学の授業と重なるため、日程調整が難しい。回数や時期が限定される。
- 大学＋支援センターで地域に普及していくのは、マンパワー的にも難しい。

⇒高校内で、特に「発達障害の特性のある生徒に必要な就労準備支援の視点」が学べないか？

⇒高校での出前講座の実施の提案へ（特に県北の高校対象に説明会を実施　H.28年度）
　平成29～30年度に私立高校1校で実施。

- 自校での実施であれば、診断の有無にかかわらず、生徒全員が学べる。
- 反面、現在のカリキュラムの中に組み込むのは難しい。実施日の確保が難しい。
- 通級の指導内容に取り込めないか？　ユースタートの活用も検討。